



筑紫女学園大学リポジット

九博連携準備委員会 2008年度活動報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 知美, OGATA, Tomomi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/412

【学内研究会】

九博連携準備委員会2008年度活動報告

緒 方 知 美

The Report of the Committee to Prepare Cooperation with Kyushu National Museum : 2008

Tomomi OGATA

はじめに

本委員会は2006年11月、前身団体「博物館と大学の新しい関係を考える協議会」（2005年、近隣の九州国立博物館開館にあわせ発足）の活動を受け継ぐ形で発足した、学内教員6名からなる組織である。2008年度をおえた現在にいたるまで2年半ちかい活動期間を経た。2007年度以前の活動については、森田真也「九博連携準備委員会2007年度活動報告」（『人間文化研究所年報』第19号、2008年8月31日）に詳しいので参照されたい。

本稿では、まず本年度活動報告をおこない、つぎに本年度活動成果を前年度までの活動成果をふりかえりつつ反省的に考察し、最後に今後の活動の展望を試みたい。

1 活動報告

今年度の企画は下記のとおり、公開講座と協議会の開催をおこなった。

1) 公開講座の開催

2008年6月12日木曜日、13時から15時まで、スクワーヴァティーホールにて。

「文化財をまもり伝える 新しい博物館と修復の仕事」

第1部 藤田勲夫氏（九州国立博物館 学芸部 博物館科学課 保存修復室長）「九州国立博物館における修復施設の概要」

第2部 鈴木裕氏（国宝修理装演師連盟 技師長、株式会社 松鶴堂 取締役）「文化財の修理と保存」

第3部 鈴木裕氏・中村隆博氏（国宝修理装演師連盟 技師）「文化財修理の実演」
参加150名。

2) 協議会の開催

2009年2月6日金曜日、14時から17時まで、本学総合会議室にて。

「地域の博物館との協議会」

主旨説明と大学からの報告「大学と地域博物館の連携の現状と課題」 本学：田村史子

各博物館からの報告「博物館の地域活動の現状と課題」

筑紫野市歴史博物館：奥村俊久氏

大宰府展示館：重松敏彦氏

九州歴史資料館：大庭孝夫氏

ディスカッション

出席17名。

前期に行った公開講座「文化財をまもり伝える 新しい博物館と修復の仕事」は、九州国立博物館で仕事をしている2人の講師によるジョイントレクチャーと、文化財修理の実演を合わせた公開講座であった。第1部は、保存科学課の学芸員である藤田氏が、九州国立博物館の最新設備をもちいて、いかなる保存活動をおこなっているかの具体例を提示した内容であった。第2部では、修復技術者である鈴木氏が、「紙の声を聞」きながら、つまりそれぞれの作品に応じて修復をおこなうという修復のポリシーを体験談とともに示された。第3部では文化財修理の技術を、学生参加の形で実演された。文化財保護の活動に、博物館科学と文化財修理という異なった立場から関与されているおふたりの話から、博物館活動のきわめて具体的な内容と、その活動をささえる理念が伺えた。

後期の「地域の博物館との協議会」では、太宰府市・筑紫野市の地域の博物館から講師を派遣していただき、本学メンバーとの意見交換をおこなった。まず「大学と地域博物館の連携の現状と課題」についての本委員会メンバー田村史子からの報告、ついで各博物館からの報告「博物館の地域活動の現状と課題」を3館よりしていただき、最後にディスカッションをおこなった。博物館からの報告では、地域での生涯学習活動への関与の現状、学校教育との連携の具体例の提示などがおこなわれた。小・中学校生に対するプログラムが充実し活発に利用されているのに対し、高校・大学との連携活動としては、主なもので学芸員課程実習生の受け入れ、そのほかは文化財発掘・整理などのアルバイトが多く、限定的な活動内容にとどまっているという現状が浮き彫りになった。ディスカッションを通して、博物館側からの大学生の若いマンパワーへの期待は大きく、大学側でも地域博物館との連携により学生教育に関して多様な展開の可能性があると期待しているが、双方とも提携への一歩を踏みだすことができてないという実態が明らかとなった。結果として、各機関に連携のための窓口を作り、情報の透明性を高め、相互の交流を促進する必要性が確認できた。

2 活動の成果

前年度行った公開講座「九博の目指すもの アジア的視点から文化交流を考える」(講師：平中英二 九州国立博物館副館長)では九州国立博物館の研究や教育の面での理念を学び、今年度の「文化財をまもり伝える 新しい博物館と修復の仕事」では同館の保存の面での活動と理念を具体的作業内容とともに知ることができた。博物館という組織の諸機能のうちの収集整理保管、教育展示という2機能について、しかも同一の組織についての活動の諸側面を、実際にその館で働いてる人の生の言葉で聴くことができたのは幸運である。

前年度の公開講座「博物館と地域連携 ミュージアムの未来像を求めて」(講師：木下達文 京都橋大学准教授)は、博物館と地域連携をテーマとしたもので、滋賀県における具体例を紹介された(本年報P323~340所載)。公開講座に先立って実施した事前研究会で、学内のさまざまな構成員間での意見交換を経ていたため、講座後の木下氏を囲んでおこなった事後研究会では、きわめて活発な意見交換がおこなわれた。木下氏は、地域全体を視野に入れた、大学・博物館・地域の連携活動の可能性を示されたが、その際重要なキーワードとして「第一につながるという意識とその持続による信頼の獲得。第二にコーディネーターの存在、第三に博物館と大学の組織的連携、第四に市民力を活用した地域振興の展開」(森田氏前掲報告参照)をあげられた。木下氏のこのような意見を踏まえ、今年度後期の企画「地域の博物館との協議会」を、本学の地域連携への可能性を探る第一歩として実施した。結果として、木下氏が第一に挙げられた、大学と博物館双方の「つながろうという意識」は確認できたと判断する。

このように今年度の公開講座・協議会は、単独企画としてのみでなく、前年度までと連続性のある企画としてとらえることが可能であり、そうすることによって本委員会の歩みの過程が検証できる。今後は、本委員会主催の講座・研究会・協議会の内容を、活字化・データベース化によって構築することで、さまざまなニーズを持つ地域の人々の利用に供し、成果の活用をはかることが望ましい。

3 最後に ~今後の活動への展望~

当然、すべての組織は目的を持って活動しているが、大学は教育・研究、博物館は文化財の収集保存・研究・展示などに限定されてきた。しかし近年、両方の組織において、地域全体を取り込んだ形で活動の輪を広げる方向、しかも生涯学習の場としての機能が着目されてきている。個別の設立意図をもつ異なった組織が、相互の連携を通して各自の目的を新たなよりよい形で達成することは望ましい。

これまで3年近く、本委員会は、上記のような連携の準備を行うことを目的として活動してきた。本委員会の名称は、前身団体の「博物館と大学の新しい関係を考える協議会」から「九博連携準備委員会」へと固有名詞を持つものに変化し、活動の目的は限定化した。しかしこの個別組織の名称を冠した委員会の活動を進める中で、とりわけ研究会をとおして、再度「博物館」を固

有名詞のものから一般名詞のものへ戻す必要性が見えてきたように思う。しかしそれは、本委員会にとって退行を意味するのではなく、そこに「地域」という活動の枠組み示す要素を加えることで、現代社会のニーズを適切に反映した目的を持つものとして再出発できるのではないかと。本委員会の活動成果を踏まえた上で、委員会に携わってきた一メンバーとして、今後の活動への展望を述べて結びとしたい。

本学はすでに「生涯学習センター」を設置しているが、今後さらに「組織的連携」へむけて、学内窓口設置・専門人員配置をしていることを地域社会に向けてアピールし、交流を促進することが必要であろう。その場合には、交流活動に責任と理念を持ってとりくむコーディネーターが必要となる。そのような人材の確保が活動成功への条件となる。

人間の生活を豊かにすることを究極的にはめざしている大学と博物館が、人々の実際の生活舞台である地域を枠として相互に鍛えあうことができれば、その「新しい関係」によって新たな果実が双方にもたらされる可能性は大きいと考えられる。本委員会できんできた地域連携・生涯学習に関する問題は、創立100周年を迎えた学園全体の目指す将来像とも大きく関係している喫緊でないが極めて重要な領域といえよう。

(おがた ともみ：アジア文化学科 講師)